

『テンペスト』の一考察

—ゴンザーローの理想国家について—

菊地 善太
日本大学大学院総合社会情報研究科

A Study of *The Tempest*

— On Gonzalo's Ideal 'Commonwealth' —

KIKUCHI Zenta
Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

The Tempest is the last of Shakespeare's tragicomedies. Since none of the characters in this play die, death could not be its theme. Instead, this play has often been considered to be a political critique. Gonzalo's speech on the ideal commonwealth is one of the issues that must be considered. His speech sounds a cynical alarm for modern society. This paper considers Montaigne's ideal society and that of Shakespeare. It also examines Shakespeare's hopes and wishes, as presented in the epilogue.

はじめに

この小論考はシェイクスピアの『テンペスト』批評における一テーマ、ゴンザーローの理想論批判についての一考察である。

シェイクスピアは、その二十歳代後半から自身の戯曲が上演される。三十歳頃までは史劇、喜劇が中心だったのが、三十歳代には悲劇に移り、四十歳代には悲喜劇を書くに至った。『テンペスト』はその悲喜劇の最後を飾る戯曲であり、シェイクスピアが単独で書いた最後の戯曲とされる。

「生か死か、それが問題だ」というハムレットの余りにも有名な台詞が語るように、悲劇においては主人公の壮絶な「生」と「死」が戯曲で描かれる大きなテーマとなるが、悲喜劇においては「死」は既にプロットの中で克服され、死んだと思われた人物は生者として蘇る。『ペリクリーズ』のマリーナ、セイーサ然り、『シンベリン』のイモジェン然り、『冬

物語』のパーディタ、ハーマイオニ然り。『オセロー』におけるデズデモナの不条理な死とは対照的である。『テンペスト』においても、ミラノとナポリの者は、皆が嵐で死んだと思われて、しかし劇中で死ぬものはいない。

では、この悲喜劇において描かれているものは「死」でなければ何なのか。『テンペスト』における私の研究動機は、この「何なのか」ということの追及にある。

『テンペスト』批評の視点は多岐にわたる。ギブソン (Rex Gibson) は『テンペスト』批評を伝統的批評 (Traditional criticism) と、二十世紀後半以降の現代的批評 (Modern criticism) の二つに分け、前者を主として個々の登場人物に視点を置いたもの、後者を主として作品の社会性に視点を置いたものとしている。更に、政治的批評 (Political criticism)、ポストコロニアル批評 (Postcolonial criticism)、フェミニスト批評 (Feminist criticism)、演技批評

(Performance criticism)、心理分析批評 (Psychoanalytic criticism)、ポストモダン批評 (Postmodern criticism)などの視点を示唆している¹。

本論考は、特にゴンザーローの理想国家発言に注目する。ここでは発言箇所のみならず、劇全体の中でのゴンザーローの発言の位置づけを考え、彼の発言について考えようとするものである。

『テンペスト』は、夢(魔法、理想)と現実、善人と悪人、解放(自由)と支配といった二項対立のテーマがあらわに含まれる。エピローグで、プロスペローは自身の行動の是非、自身の未来を観客へ問いかける。観客は答えを、対立するテーマから支持する一つの選択を迫られる。ゆえに『テンペスト』は観客にとって選択の劇ともいえる。観客である私たちは何を肯定し、何を否定し、どんな未来を志向するのか。『テンペスト』は四百年経った現代でも、私たちに選択を迫っている。

1. モンテーニュの理想論

ゴンザーローのユートピア的発言、とりわけ二幕一場の理想国家についての発言はフランスのモンテーニュ (Michel de Montaigne) が『随想録』(*Essais*) で新大陸の原住民の社会について述べた記述に依っていると指摘されている²。また、『随想録』の記述のその章の題名が「カンニバルについて」(“Des Cannibales”、英訳は“Of the Caniballes”) で、野蛮な原住民を意味する Caniballes からキャリバン (Caliban) の名がつけられたことが指摘されている³。

以下の引用の上段はゴンザーローの台詞の箇所⁴、下段はモンテーニュ『随想録』のフロリオ (John Florio) による英訳⁵の一節である。

GONZALO

I'th' commonwealth I would by contraries
Execute all things, for no kind of traffic
Would I admit; no name of magistrate; (150)
Letters should not be known; riches, poverty
And use of service, none; contract, succession,
Bourn, bound of land, tilth, vineyard – none;

No use of metal, corn, or wine or oil;
No occupation, all men idle, all; (155)
And women, too, but innocent and pure;
No sovereignty –

SEBASTIAN

Yet he would be king on't.

(*The Tempest*, II-i-148-58)

...It is a nation, would I answer *Plato*, that hath no kinde of traffike, no knowledge of Letters, no intelligence of numbers, no name of magistrate, nor of politike superioritie; no use of service, of riches, or of poverty; no contracts, no successions, no dividences, no occupation but idle; no respect of kinred, but common, no apparrell but natural, no manuring of lands, no use of wine, corne, or mettle. The very words that import lying, falshood, treason, dissimulation, covetousness, envie, detraction, and pardon, were never heard of amongst them. How dissonant would hee finde his imaginary common-wealth from this perfection?

(John Florio (trans.), “Of the Caniballes”)

これらを見比べると、確かに両者には強い類似があり、シェイクスピアが『テンペスト』の着想において、モンテーニュの『随想録』を読んで強く意識していたことが頷ける。

モンテーニュは原住民の社会の素晴らしさをたたえるとともに、現代人に猛省を促している。モンテーニュ学者の関根秀雄はかく述べる⁶。

彼(モンテーニュ⁷)は当時ヨーロッパ人に征服されたアメリカ原住民のことを『随想録』のあちこちで語っているが、彼は常にそれらの罪の無い純真な土人にあふれる同情を注ぎ、また文明人の飽くなき搾取と卑怯な欺瞞について憤っている。

関根は「モンテーニュの諷刺の辛辣とその底にひそむ公憤⁸」とも述べており、ここに辛辣な風刺も読

み取っている。荒木昭太郎も次のように述べている⁹。

(モンテーニュは¹⁰) 彼らの生き方のほうが、より自然本来の、素朴で純粋なものだと評価して、文明開化し、進歩発展した自分たちの生活習慣、生存実態のほうこそ、はるかに人間本来のありようから遠い、と痛烈な反省を記す。

シェイクスピアはモンテーニュが原住民を賞賛していたことを理解していたであろう。しかし『テンペスト』において、シェイクスピアは原住民の国家を讃えて現代を諷刺するのではなく、原住民の国家までも諷刺の対象としている。

ギブソンは次のように批評する¹¹。

In Gonzalo's 'commonwealth' speech Shakespeare provides a radically different view of rightful authority. In that utopian vision it simply disappears: no government is necessary or desired. Gonzalo's speech also provides a vivid contrast to how Caliban is portrayed. In the ideal commonwealth there are no savages, only peaceful people who live naturally in harmony. As Scene I unfolds, that theme of nature versus nurture (or 'civilisation') is given a biting ironic twist as the 'civilised' Antonio and Sebastian prepare to murder their way to power.

この批評は理想と現実のギャップを強く突いている。シェイクスピアはゴンザーローの言葉を借りて現実の国家とはかけ離れた理想国家を語り、劇の登場人物とはかけ離れた人間を語っている。キャリバンと理想国家の人間との対比は自然とともにある人間を諷刺し、アントーニオやセバスチャンと理想国家の人間との対比は文明社会の人間を諷刺している。

ただ、アントーニオやセバスチャンは全ての現代人(文明人)の代表というわけではない。彼らの倫理観への批判はプロスペローやゴンザーローやミランダには当たらない。この点で、シェイクスピアの

現代社会の人間に対する諷刺は部分的、限定的と言える。

パーマー(D. J. Permar)はその『シェイクスピアテンペスト: ケースブックシリーズ』¹²の序文で、シェイクスピアの視点はモンテーニュの『随想録』のそれよりも複雑だと指摘している¹³。

But in other respects Shakespeare's point of view is more complex than that of the essay: Gonzalo's raptures are treated ironically, and Caliban, in his brutality and cunning, is scarcely an idealized representation of the savage.

ゴンザーローは有頂天になってからかわれ、キャリバンのありようは理想国家の住民とは程遠く描かれる。シェイクスピアはゴンザーローの言葉を通してモンテーニュの伝えるような原住民の国家を讃える一方で、キャリバンを引き合いに出してそれが理想に過ぎないと諷刺している。

ゴンザーローは、先に引用した理想国家の発言の後で、次の補足発言をしている¹⁴。

GONZALO

All things in common Nature should produce
(160)

Without sweat or endeavour: treason, felony,
Sword, pike, knife, gun, or need of any engine,
Would I not have; but Nature should bring
forth,

Of it own kind, all foison, all abundance,

To feed my innocent people. (165)

(*The Tempest*, II-i-160-65)

モンテーニュの『随想録』(フロリオ訳)では次の箇所¹⁵が対応するであろうか。

There warres are noble and generous, and have as much excuse and beautie, as this humane infirmitie may admit: they ayme at nought so much, and have no other foundation amongst

them, but the meere jealousie of virtue. They contend not for the gaining of new landes; for to this day they yet enjoy that naturall ubertie and fruitfulness, which without labouring-toyle, doth in such plenteous abundance furnish them with all necessary things, that they neede not enlarge their limites. They are yet in that happy estate, as they desire no more, then what their naturall necessities direct them: whatsoever is beyond it, is to them superfluous.

(John Florio (trans.), “Of the Caniballes”)

ここでモンテーニュの伝える原住民の社会には戦争があり、まだ武器がいない所までは至っていない。この点でゴンザーローの理想国家は、モンテーニュの伝える原住民のそれより誇張された表現になっている。しかし、その原住民は、自給自足ができるために、侵略でもない限り戦争を起こす必要はない。つまり理想状態では武器はいらなくなるといえる。

2. 理想国家論への批判

以下、理想国家論に対する批評を、さらに見ていきたい。ダウデン (Edward Dowden) は論文『『テンペスト』の平静』 (“The Serenity of *The Tempest*”, 1875) ¹⁶において、ゴンザーローの台詞の内容自体に非合理さや自己矛盾があると指摘する¹⁷。

... Here is the ideal of notional liberty, Shakespeare would say, and to attempt to realise it at once lands us in absurdities and self-contradictions:

「我々がその理想を実現しようとする、すぐにも非合理さや自己矛盾の中に置かれてしまう」とあるが、誇張的な部分だけをみずにモンテーニュの言葉を代弁しているとみれば、一概に非合理や自己矛盾とは言い切れない。理想は未来への努力目標として考えることができる。

先の関根の言葉のようにモンテーニュが「罪の無い純真な土人にあふれる同情を注ぎ、また文明人の飽くなき搾取と卑怯な欺瞞について憤っている」のであれば、私達は罪の無い純真な生き方を心がけ、弱者からの搾取や卑怯で欺瞞な言動をしないように努力すればいいのである。それは非合理でも自己矛盾でもない。

仮に字義通りみた場合でもまったくの非合理というわけではない。たしかに私たちは既に言葉や学問を覚え、道具や加工品を当たり前のごとく使い、争いごとが絶えない現実世界に住んでいる。しかし、人類が未来永劫にわたってなしえない世界かということ、そこまでは言い切れまい。将来、戦争や自然災害で今の文明が崩壊したり、宇宙船で無人の惑星に漂着したりすれば、その後の世界で人間が自然と共に平和裏に生きていける可能性は否定できない。

『テンペスト』においてシェイクスピアが最後に魔法の島に求めたのは魔法も統治もない自然状態である。島はキャリバンに委ねられて幕が閉じる。観客がそこに未来への希望を見出してくれることを、シェイクスピアは願ったのではなかろうか。

ムリー (J. Middleton Murry) は論文「シェイクスピアの夢」 (“Shakespeare’s Dream”, 1836) ¹⁸において、シェイクスピアの思いを人類が原住民に戻るのではなくて人間の技によって罪のない社会を目指すことにあると主張する¹⁹。

So Shakespeare makes clear his conviction that it is not by a return to the primitive that mankind must advance.

And thus it is that Shakespeare, in Gonzalo’s words, with splendid irony changes Montaigne’s report of the Indians, from mere nature, to a picture of nature’s art in man, working of man. ... It is the innocence not of the primitive, but of the ultimate, which he seeks to embody.

ムリーの視点は、人間の手による未来への希望に向いている。彼はモンテーニュのいう原住民の社会

には戻れないとするが、人類が罪を生み出さない社会に向かって歩いていく希望を見出している。

フィードラー (Leslie A. Fiedler) は「アメリカインディアンとしてのキャリバン」(“Caliban as the American Indian”, 1973)²⁰において、プロスペローの島の出来事がいずれも理想の国とは異なることから、シェイクスピアはゴンザーローの理想論には味方していないと指摘する²¹。

And when Shakespeare allows this vision to be mocked through the foul mouths of the bad brothers, Sebastian and Antonio, it is Montaigne's dream of communist utopia in the New World he is allowing them to vilify.

... Certainly Shakespeare is on their side in the debate, utter, even hopeless villains though they may be, for the events of the play prove them, not Gonzalo, right.

また、前川正子も小田島雄志訳『テンペスト』の「解説」²²で次のように批判する²³。

彼の理想郷は、『テンペスト』全体の中でも称揚されているとは言い難い。

フィードラーと前川の指摘は一面で理解できる。ゴンザーローの理想国家はセバスチャンとアントーニオによって嘲笑され、君主のアロンゾーもそれを取り合わない。身分制度のない国の王様というのは理屈的にもおかしい。理想国家が語られる場面ではゴンザーローは称揚されているとは言い難い。

しかし、一幕二場のプロスペローの昔語りや五幕一場の和解の場面などで、ゴンザーローはプロスペローによって「高潔なゴンザーロー(noble Gonzalo)」と何度も語られ、ゴンザーローは称揚されている。

一方でセバスチャンやアントーニオ、それにアロンゾーが称揚されているとは言い難い。彼らは悪党として描かれ、二幕一場でセバスチャンとアントーニオが企てた暗殺は失敗する。三幕三場では彼らは幻影に脅かされ泣きわめく。五幕一場の和解の場面で罪を許されても尊敬を受けるものではない。

『テンペスト』全体を通してみればゴンザーローは称揚され、セバスチャンらは称揚されていない。

したがって、『テンペスト』全体を通して観た観客は、ゴンザーローの理想国家発言を振り返ったときに、二幕一場を観ていたときよりもゴンザーローを称揚して受け止める可能性がある。

コット (Jan Kott) は、『シェイクスピアは我々の同時代人』(*Shakespeare Our Contemporary*, 1965)²⁴において、政治的批評の視点からプロスペローの国に理想郷は全くなく、現代社会もまた狂気と暴力と圧制に犯されていると指摘する。コットは人間の歴史が暴力的で残酷な権力闘争が繰り返されていると悲観する²⁵。

His (Kott's) discussion of *The Tempest* is similarly concerned to show how it reflects modern political cynicism, violence, conflict and social breakdown. ... Kott recognizes the island is no utopia: 'on Prospero's island the laws of the real world apply', and Kott sees that world as relentlessly cruel, violent and oppressive.

藤田実編注『テンペスト』²⁶はコットの言葉として『テンペスト』は幻滅と苦い叢智とはかない希望の劇²⁷と取り上げている。一方で『テンペスト』が「楽しい劇」であることも指摘している²⁸。

『テンペスト』は、一見して現実と超現実が豊かに交錯し、精霊がとびかい、精妙な音楽が流れ、美しい男女が結ばれる楽しい劇である

『テンペスト』が楽しい劇であることは、悲観的な気分を楽観的な方向に持ち上げる効果があると考えられる。五幕一場のミランダの「ああ素晴らしい新世界だわ(O brave new world)²⁹」という言葉は、諷刺もある反面、元気や希望も与えてくれる言葉ではなからうか。ゴンザーローの理想国家論の発言も、からかわれて笑いを誘うだけでなく、理想を楽しげに語ることで観客にも理想を求めようという希

望を与えてくれる。

3. 新しい世界への希望

前節で、ゴンザーローが言うような理想郷がないという解釈がある反面、『テンペスト』は楽しい劇でもあり元気や希望を与えてくれる劇だということを最後に述べた。

前向きな希望や喜びを語ることは、『テンペスト』におけるゴンザーローの役割の一つと考えられる。ゴンザーローは理想国家の発言の場面に限らずどの登場場面でも希望や喜びを語っている。一幕一場では嵐で溺れても陸に着くことを祈り、二幕一場では生きていることを喜び、理想の国家を語り、王子の守護を祈る。三幕三場では魔法の幻影を喜び、五幕一場では苦痛からの救いを祈り、再会を祝い寿ぐ。

したがって、このゴンザーローの役割から理想国家の発言を考えれば、ここはコットの言うはかない希望だけでなく、もっと前向きな希望、幸せで善なる未来への希望も与えてくれると考えられる。

先の理想国家論批判のところ、ゴンザーローはプロスペローに称揚されていることを述べたが、これはゴンザーローの希望を語る者としての役割を強めるものではなかろうか。

『テンペスト』において、一番の主演はプロスペローであり、劇に込められたシェイクスピアの思いは、何よりプロスペローの言動に宿っていると考えられる。ここで、この劇におけるゴンザーローは、プロスペローが唯一絶大な信頼と尊敬を与える登場人物であり、その信頼は終始揺るがない。ゴンザーローの発言は、プロスペローから否定されない限り、シェイクスピアに擁護されているとも考えられる。

プロスペローの未来への願いは、特にエピローグの発言に込められていると考えられる。エピローグでプロスペローは観客に願い祈る。エピローグを引用する³⁰。プロスペローはかく願う。

spoken by PROSPERO

Now my charms are all o'erthrown,
And what strength I have's mine own,
Which is most faint. Now, 'tis true

I must be here confined by you,
Or sent to Naples. Let me not, (5)
Since I have my dukedom got
And pardoned the deceiver, dwell
In this bare island by your spell;
But release me from my bands
With the help of your good hands. (10)
Gentle breath of yours my sails
Must fill, or else my project fails,
Which was to please. Now I want
Spirits to enforce, art to enchant;
And my ending is despair, (15)
Unless I be relieved by prayer,
Which pierces so that it assaults
Mercy itself, and frees all faults.
As you from crimes would pardoned be,
Let your indulgence set me free.

最初の部分は、プロスペローが彼の島で行なってきたことの反省である。プロスペローは魔法を捨て、キャリバンや妖精たちへの支配を捨て、それを罪として反省する。前節でなされてきた理想国家批判は、この罪を指摘し批判しているものといえる。ただ、前節では、その罪ゆえにシェイクスピアが現在社会を憂い、悲観的な見方をしているとしているが、もしシェイクスピアが本当に悲観して絶望しかけているなら、ここで罪の許しや再生の祈りなど願うことはないであろう。

だがプロスペローは、最後の部分で観客に新たな旅立ち、再生の祈りを願う。慈悲をもって罪の許しを、そして自由を祈るのだ。この自由とは何であろうか。誰の自由であろうか。まず、プロスペローは魔法を捧げることを代償にしたのであるから、彼の魔法が持っていた束縛から解放されることが、ここで言う自由だと考えられる。

プロスペローの魔法は実質的に彼の島の全ての人々を支配していた。いわばプロスペローの魔法の国があり、人々は魔法により数奇な経験を得、ある者は考え方も変えていった。妖精たちも、キャリバンも、ミランダも、漂着者たちも、皆彼の魔法の支配・庇護下にあった。そして、皆、魔法の影響を

受けて、ある者は支配・被支配を嫌い、ある者は罪を悔いて反省し、ある者は人間に更なる魅力、善なる人々の魅力を見出した。

だが、エピローグの台詞の時点で、親子の情や友人への信頼を除いて、プロスペローが他者を縛る術は失われる。結果、彼の魔法の国は崩壊し、プロスペローは魔法で他者を束縛することから解放され、その他の人物はその魔法の支配から解放される。ここでいう自由は、ゆえにプロスペローの島にいた全ての人の自由だと考えられる。

自由を与えられた人々は、しかし新たな世界を築いていくことを要請される。島に残るキャリバンや妖精たちは、プロスペローのなくなった島を再生しなければならない。プロスペローとミランダを含む、ナポリ、ミラノの一行も、為政者や部下の変化によって新しい国のありようを求めることになる。

そこに未来への希望がある。そして、彼らの未来を想像するのは観客である。観客は、もちろんどんな想像もできるが、シェイクスピアは、ゴンザーローに理想国家を語らせることで、観客に新世界、未来社会の一つの具体的なイメージを提示した。悪人は悔い改めさせた。善なる人々による、争いを求めない平和な社会、いたずらに自然を破壊し搾取しない共生の社会を。

劇中で、ゴンザーローの言葉ほど、観客に新世界のありようを示唆するものは見つけれられないように思われる。とすれば、ゴンザーロー、モンテニューの理想国家論の中に、シェイクスピアもまた、人間のあるべき姿、これから未来に向かって人類が努力すべき道を、見出していたのではないかと考える。

4. 終わりに

さて、以上見てきたように、ゴンザーローの理想国家の発言には、モンテニューの影響が強く見られた。モンテニューは、新大陸の原住民たちが、野蛮人とよばれながらも、自然と調和した生活を営み、争いのない社会を築いていることを賞賛した。

プロスペローの魔法の島、いわば魔法の国は、しかしながらこういった理想の国家ではなかった。そこには魔法による支配があり、争いを起こす原住民

がいた。そこに漂着した人々も、善人だけとは言えず、残酷な悪党もいた。

シェイクスピアは、プロスペローにゴンザーローを賞賛させることでモンテニューへの賛同を示し、アントーニオたちからかわせることで現実社会を諷刺し、悪党たちの理想のなさを皮肉ったと考えられる。

だが、プロスペローの魔法は、善人には更なる人間への希望を、悪人には反省を促した。何人たりとも魔法によって殺されることはなかった。もしプロスペローが魔法の国での安住に満足していたら、物語はそこでハッピーエンドになって終わりになったかもしれない。

しかし、プロスペローは魔法の杖を折って、新たな世界を築いていくことを望んだ。それは魔法による舵取りの効かない世界。それは観客、すなわち現実世界の間人々たちによって築かれていく世界である。そこにプロスペローの、いやシェイクスピアの、現実世界の間人々たちに対する信頼、希望といったものがある。

このとき、ゴンザーローの理想国家の発言は、新世界の一つのイメージとして、観客の心の中で溶けていく。シェイクスピアのモンテニューへの思いはこうして観客に伝わり、試される。

『テンペスト』の観客は、十七世紀のロンドンの観客ばかりではない。何世紀にもわたり何度も上演されたそれは、四百年経った二十一世紀の現在でも、世界中で上演される人気戯曲の一つである。プロスペローは、上演される時代や場所を問わず観客に魔法を見せ、最後に許しと自由を請う。観客もまた、時代や場所を問わずプロスペローへの、即ちシェイクスピアへの回答を考えさせられるのである。

今の世の中は、十七世紀の世の中にもまして自然との共生から乖離し、科学技術に頼り、争いごとが絶えず、大量虐殺を起こせる戦争まで否定しない世の中になっている。現代のナポリもミラノも、そういった世の中に組み込まれており、このまま乖離が大きくなれば私たちはいつかプロスペローが帰る国をイメージできなくなってしまうだろう。

人々の善なる心への回帰、国家再生への期待、そういうものを持ち続けられる世の中でない、いず

れハッピーエンドに終わらない翻案が出てくる。或いは杖を捨てない、魔法の島だけで終わる翻案が出てくるかもしれない。実際、二十世紀の米ソの冷戦時に登場した『テンペスト』をモチーフとしたと言われる映画³¹の一つ『禁断の惑星』(*Forbidden Planet*, USA, 1956)³²では、プロスペローに相当するモービアス博士は、新しい旅立ちが出来ずに死んでいきハッピーエンドにはならなかった。

少し前にパリの劇場で観た『テンペスト』(ジャン・ルイ・クリノン(Jean-Louis Crinon)演出)³³は、衣装はカラフルで、照明も明るく、演技の動作もわかりやすく、全体にコミカルで明るい演出であった。皆が和解してのハッピーエンドで、私はプロスペローがミラノに帰ることを思った。

今後とも様々な『テンペスト』を観劇し、プロスペローやゴンザーローたちの未来を考えることを課題としたい。

注釈

¹ 文献(1) pp.88-106

² 文献(4) p.194

脚注記載(148-57行)

148-57 Gonzalo's description of his ideal commonwealth borrows heavily from John Florio's translation of Montaigne's 'Of the Cannibales'.

³ 文献(3) p.14

Caliban may derive his name from a simple anagram of 'cannibal'

⁴ 文献(4) pp.194-5

下訳は小田島雄志、文献(7)

ゴンザーロー

その国家では、万事世のなかと逆にしたいと
思います。まず、取引はいっさい認めません。
官職は廃し、学問は広めず、裕福とか貧乏とか
の差をなくし、したがって奉公というものもな
くなるわけです。契約、相続、境界、領地、田
畑、葡萄畑などなくし、所有権をめぐる法律問
題も起こらなくなります。金属、穀物、酒、油
などの使用を禁じ、職業はなにもなくなります。
男はみんな遊んで暮らします、女もです、ひた
すら無心に清純に生きるのです。君主権もな
く
し
ま
す
—

セバステア

それで王になろうというのか。

⁵ 文献(3) pp.304-5

下訳は関根秀雄、文献(10) p.402

私はプラトンに教えてやりたい。「この国には、全くいかなる種類の取引もない。文学の知識もなければ数の概念もない。役人という言葉もなければ統治者という言葉もない。人に仕えるという習慣もなければ貧富の差別もない。契約も相続も分配もない。楽しい仕事はあっても苦しい労役はない。長幼の序などはなく人はみな平等である。着物も農作物も金物(かなもの)もない。葡萄酒も麦もいっさい用いない。嘘・裏切り・隠しごと、吝嗇(りんしょく)・嫉(そね)み・悪口・勘弁などを意味する言葉は、いまだかつて聞かれたことがない」と。さすがのプラトンもこれを聴いたら、いかにその理想の国が、この完全に遠く及ばないかを知って驚くことであろう。

⁶ 文献(10) p.395

⁷ 括弧部分は引用者(菊地)補填

⁸ 同上

⁹ 文献(5) p.202

¹⁰ 括弧部分は引用者(菊地)補填

¹¹ 文献(1) p.28

下訳は私訳。括弧内は訳者注

ゴンザーローの‘理想国家’の発言において、シェイクスピアは正当な国家権威の見方とはまるで異なった視点を供給している。ゴンザーローの理想郷の視野の下では、国家など簡単に消え去ってしまう。なぜなら、統治する国がない、又は統治する国が必要とされないのである。また、ゴンザーローの発言は、劇中のキャリバンがいかに理想から離れて演じられているか、その対比をまざまざと見せつける。その理想国家においては、野蛮さなどは微塵もなく、ただ平和な人々だけがいて、ありのままに生き、自然と調和した生活をしているのだ。この第二幕第一場の展開のように、自然にあるべきか教化(文明化)されるべきかといったテーマは、‘文明化された’アントーニオやセバスチャンが権力を得るために殺人までも準備するがごとく、辛辣なる皮肉で振られて与えられるのである。

¹² 文献(3)

¹³ 同、p.14

下訳は私訳

別の観点では、シェイクスピアの視点は（モンテーニュの）『随想録』よりも複雑であって、有頂天なゴンザーローは皮肉に嘲笑され、野蛮で狡賢いキャリバンは（モンテーニュの言う）原住民の理想の表象とはとてもかけ離れたものになっている。

¹⁴ 文献（４） p.195

下訳は小田島雄志、文献（７）
ゴンザーロー

暮らしに必要なものは自然が産み出してくれます、人間が汗水流して働くことはありません。そうなれば、反乱も重罪もなく、剣、槍、短刀、銃砲などの武器も無用の長物となります。大自然はひとりでに豊かにかぎりなく五穀を実らせ、幼子のように無心に遊ぶ人々を養ってくれるでしょう。

¹⁵ 文献（４） p.309

下訳は関根秀雄、文献（10） p.407

彼らの戦争は徹頭徹尾高貴高邁であって、この人間的病（やまい）がもち得る限りの申し訳と美しさを持っている。彼らの間では、戦争はただ一つ徳の尊重ということ以外には、なんらの根拠ももたないからである。彼らは新しい土地を征服しようとして戦わない。まったく今なお彼らは、労苦しないでも必要なものは何でも得られるという、自然の豊かさを満喫しているし、その国境を拡張する必要がないほどにゆたかなのである。今でも彼らは、自然の要求が命じる以外のものは少しも欲望しないという、幸福な状態にいたので、結局それ以上のものは彼らには余計なものなのである。

¹⁶ 文献（３） pp.61-6

Dowden, Edward, "The Serenity of *The Tempest*", 1875 in Palmer, D. J. (ed.), *Shakespeare: The Tempest, Casebook Series*, Macmillan, 1991 (Revised ed.)

¹⁷ 同、p.65

下訳は私訳

ここには、シェイクスピアが非現実的な自由とでも呼びそうな理想の形があり、我々がその理想を実現しようとする、すぐにも非合理さや自己矛盾の中に置かれてしまう。

¹⁸ 文献（３） pp.93-104

Murry, J. Middleton, "Shakespeare's Dream", 1836 in Palmer, D. J. (ed.), *Shakespeare: The Tempest, Casebook Series*, Macmillan, 1991 (Revised ed.)

¹⁹ 同、引用上段 p.99、下段 p.101

下訳は私訳

ゆえにシェイクスピアは、人類が向かうべき

先は原始の状態ではないとの確信を持つ。

…かくしてシェイクスピアは、ゴンザーローの言葉に諷刺を富ませ、原住民についてのモンテーニュのレポートを、全くの自然状態のイメージから、人間に作用する、人間の手の掛かった自然のイメージへと変える。

…それは原始社会の純真な罪のない状態ではなく、シェイクスピアが実現を望む進化の先にある究極の純真で罪のない状態である。

²⁰ 文献（３） pp.167-175

Fiedler, Leslie A., "Caliban as the American Indian", 1973 in Palmer, D. J. (ed.), *Shakespeare: The Tempest, Casebook Series*, Macmillan, 1991 (Revised ed.)

²¹ 同、引用前半 p.168、後半 p.169

下訳は川地美子、文献（６） pp.306-7

シェイクスピアは、セバスチャンとアントーニオという悪い兄弟の汚い口をとおしてこの理想を嘲笑うままにする…彼らはまったく望みのもてない悪者だが、議論においてシェイクスピアはたしかに彼らの味方をしている。なぜならこの劇の出来事が、ゴンザーローではなく彼らのほうが正しいことを証明している。

²² 文献（９）

²³ 同、p.163

²⁴ 文献（２）

²⁵ 文献（１） p.96

下訳は私訳

『テンペスト』における彼（コット）の議論は、同様に、いかにこの劇が、現代の政治的な皮肉や、暴力や、紛争や、社会崩壊といったものを反映しているかということに関わっている。…コットは、このプロスペローの島は欠片も理想郷はなく「プロスペローの島は現実社会の法則が適用されている」と認識する。さらにコットは、その世界が、冷淡で残酷な、暴力的な、そして圧制的な世界だとみている。

²⁶ 文献（８）

²⁷ 同、p.52

²⁸ 同、p.54

²⁹ 文献（４） p.275 (V-i-183)

³⁰ 同、pp.285-6

下訳は小田島雄志、文献（７）

プロスペロー

私の魔法は消えました、
生身の私となりました。

私をここに残すのも、
 あるいはナポリにかえすのも、
 皆様次第でございます。
 ですがお願いいたします、
 公国をまたわが手にし、
 罪を許したこの私、
 この裸島に残るよう、
 魔法をおかけにならぬよう。
 どうか拍手の数を増し、
 自由を与えてくださいまし。
 皆様がたのあたたかい
 おことばだけがわが救い、
 それなくしては、私の
 楽しんでいただこうとの
 願いもたちまち水の泡、
 なぜならもはやこの身には、
 使う妖精たちもなく、
 魔法をかける術（すべ）もなく、
 絶望のみしかありませぬ、
 祈りをまつほかありませぬ。
 祈りは慈悲なる神々の
 心に訴えかけるもの。
 罪の許しを、皆様も
 祈られるよう、私も
 この身の自由を、皆様に
 お願いします、このように。

³¹ 文献（ 1 ） pp.127-8、文献（ 4 ） pp.112-24

³² 文献（ 1 ） p.128

Forbidden Planet (USA, 1956)

Director: Fred McLeod Wilcox

A science fiction film set in 2257. Ariel becomes Robby the Robot, Prospero is Dr Morbius, and Caliban is Dr Morbius' unconscious ('this thing of darkness, I / Acknowledge mine'). The film, made during the cold war between Soviet and capitalist countries, reflects contemporary anxieties about scientists' responsibilities (especially concerning the development of nuclear weapons).

³³ *LA TEMPESTE*, Ville de Neuilly-sur-Seine Théâtre
 Le Village, 08 March, 2005

- (1) Gibson, Rex (ed.), *Cambridge Student Guide: The Tempest*, Cambridge University Press, 2004
- (2) Kott, Jan, *Shakespeare Our Contemporary*, Methuen, 1965
- (3) Palmer, D. J. (ed.), *Shakespeare: The Tempest, Casebook Series*, Macmillan, 1968, 1991 (Revised ed.)
- (4) Vaughan, Virginia Mason and Vaughan, Alden T. (ed.), *The Tempest, The Arden Shakespeare Third Series*, Thompson Nelson and Sons Ltd, 1999
- (5) 荒木昭太郎、『モンテーニュ — 初代エッセイストの問いかけ』、中央公論新社、2000年
- (6) 川地美子、『シェイクスピアにおける異人』、みすず書房、2002年
- (7) 新潮社編、『シェイクスピア大全：CD-ROM版』、新潮社、2003年
- (8) 藤田実 編注、『大修館シェイクスピア双書：テンペスト』、大修館書店、1990年
- (9) 前川正子、「解説」、シェイクスピア著、小田島雄志訳『テンペスト』、白水社、1983年
- (10) モンテーニュ著、関根秀雄訳、『モンテーニュ随想録（全訳縮刷版）』、白水社、1995年

(Received: May 31, 2005)

(Issued in internet Edition: July 1, 2005)

文献